
ソードワールド短編 「風の舞う日」

駄文亭文楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードワールド短編 「風の舞う日」

【Nコード】

N0595BA

【作者名】

駄文亭文楽

【あらすじ】

「TRPGはじめて物語」の蔵出し小説からの転載
ひよんなことから助けたハーフェルフの少女は、仲間と因縁のある少女であった。囚われた少女の母を救うため、彼女の祖父である貴族と敵対することになってしまったが、その背景にはアレクラスト大陸より遙か、遙か南の神獣の民が暗躍していた。

(前書き)

十年以上前に書いたソード・ワールドの短編小説です。
文章も稚拙な上、いろいろとツツコミどころが多い作品になっています。

指摘、ツツコミ待っています。

まだ夜明けと言うには早すぎる時間、誰もいない街道に人影が一つ。青年は眠そうな目を擦る。少々足元もおぼつかない様に思える。冒険者の彼には元々早く起きる習慣があったわけではない。彼の同室の人間が早起きなので起こされてしまうのだ。神経質と思われるだろうが、これも戦士の性なのだから仕方ない。だから「冒険者の店」が開店するまでこうして時間を潰すときが多かった。

彼の名前はL・O・Nと言う。言わずと知れた事だろうが、この名前は伏せ字である。彼の本当の名を知る人間は彼の仲間以外にアレクラスト全土にどれほど居るだろうか？

そして、そんな彼とその仲間達が生業としている職業は「冒険者」と呼ばれるものである。冒険者といえば聞えが良いが、実際彼らがやっている事といえば、「何でも屋」よろしくの仕事ばかりを引き受けている。

さて、そんな話を話している間に彼はすでに毎朝の定番となった散歩にも飽きたらしく帰路についた。すると、城門の方から足音がL・O・Nの耳に届いた。その音が駆け足である事は容易に判断できた。しかも、その足音の乱雑さから複数と判断できる。

「……僕と同類？」

そんな訳はないだろうとは思う。彼は振り返り、音のする方に意識を向ける。最初に目に入ったのは少女だった。まだ十にも満たないくらいの小さな娘である。その奥に彼女を追いかける一見して柄の悪い男達。

「……やれやれ」

自分の人の良さを呪いながらL・O・Nは少女を助けに向かった。

「こんなものでしょうか？」

茫洋とした美貌が朝日に照らされている。どうやって出たのかわからないが城壁から一時間ほど離れた林とも草原ともつかない場所にたたずむ美貌の青年。少し学の有る人間なら……いや、このくらいならば街の全員がわかる事だろう。彼の金糸を思わせるような髪から突き出た尖った長耳と、切れ長の目。エルフ族の特徴である。生まれながらの精霊使いであり、彼は戦士としての訓練も受けている。それだけに止まらず薬師としての能力を持っている。そのせいか毎朝、薬草を摘みに朝早くからこんな所に出てきているのだ。

「そろそろ戻りましょうかね」

独り言？……と言うわけではない。彼の盟友たるシルフに声をかけている。彼自身に意志はなく声をかければ頷くだけだが、それだけでもこの青年は十分だった。

彼の名はアスティ。L・O・Nの仲間の一人でもある。エルフとして少々変わったところもあるがパーティーの意見番として仲間内で一目置かれている存在でもある。が、ある事件が切っ掛けで、パーティーのマスコットと化している。

「おはよー」

ここは冒険者の店「麗しの我が家」亭。「古代王国の扉」亭に比べて異種族の冒険者がよく利用する。その冒険者の店で若いながら一目置かれた存在がこの明るいだけを取り柄のようなハーフエルフの少女であるのだが……

「おはよう、ミア」

「あれ、L・O・N達まだ帰ってないの？」

ミアと呼ばれたハーフエルフが呑気にそう言う。

アスティほどではないものの美少女の部類に入る少女は、この冒険者の店では場違いと言う感が見受けられる。外見年齢は十五、六歳だが実際はその倍近い年月は生きているのではないだろうか？しかし、彼女に実年齢を聞くような愚かな真似は出来ない。彼女は優秀

な魔法使いであるからという理由もあるが、戦士並みの筋力もあり、下手な事を聞こうものなら酷い目に遇う事は目に見えている。傭兵団で「死神」と恐れられたL・O・Nでさえ「君いくつ？」と言う言葉を彼女の前では禁句としているのだから、その怖さというのはわかっていただけるだろうか？

「ただいま帰りました」

間延びした声が冒険者の店の食堂に響いた。無論その声はアステイのものである事は判断できた。

「遅かったねえ」

ミアが尋ねる。心配している様子はない。

「ええ、帰り際に占い師のおばさんに会いましてね。少し占ってもらったんです」

「どうだったの？」

「懐かしき再会。だそうです」

アステイは笑いながら答える。

「何それ？」

「さあ」

彼は両手を肩の上まで挙げて彼女の意見に同意し、調理場の方へと毎朝の恒例のハーブティーを煎れに行った。

少し時間を遡りL・O・Nのお話に……

「あんたら冒険者だな」

のうのうとL・O・Nが言う。彼の後ろには逃げて来た少女を匿っている。どうやら彼女には「沈黙」の魔法が掛けられているらしく、彼女の発する音が聞えない。

「そうだ。どうやらあんたもご同業らしいが、少しそこを退いてもられないか？」

「いい大人がこんな子供を追い駆けるというのはちよつと見逃せないんだよ。ああ！また自分から巻き込まれてる……ミアやライトになんて言われる事か」

と言って天を仰ぐ。その一連の動作が実に芝居っぽくて笑えない事もない。

「依頼なんでな」

「なんでそんな依頼受けたんだい？」

「金が良かったんだよ」

「納得」

「してもらえたかい？」

「動機は納得したけど、やっぱり……」と言うとL・O・Nは腰に履いた剣を引き抜いた。その剣は素人目から見ても魔法剣とわかる逸品だ。

「フェイムフェイス……」

周りを囲む男達の一人からその名が漏れる。その声にはありありと畏怖の念が込められていた。

「と言う事は……死神のL・O・N……」

「なに！」

戦士風の男が叫び声を挙げる。

「いつもの大鎌を持っていなかったから判らなかったが確かにこいつは……」

彼はそう言いかけて息を飲んだ。この男の武勇伝は戦士を生業とするのならば誰でも知っている。十歳の頃から戦場に立ち、噂によるとロドールルの一個師団相手にしても『負けなかった』という。……無論、彼らにそれだけの能力は持っていない。

「どうした？」

「あ……」

相手の正体を悟り逃げ腰になる。彼の手中の獲物は鎌ではないが、それと同じくらい凶悪な魔剣を抜き放ちいつでも自分らを斬り殺せる状態に入っている。

「殺される」

一同はそう思ったが、もう引くに引けないような気がした。剣匠の威と言うやつだろう。

「こらー！何をしているか」

いきなり大きな太い声が一同を一喝した。このチャンスをしめたと
思ったか取り囲んだ男達は逃げ出した。

「おかしな連中だな」

「どちらがだ」

太い声が軽いため息めいた言葉を吐いたL・O・Nにかけられる。

「いくら貴様が強くても足手纏いがいては戦い辛かろう？」

「確かに……とりあえず礼を言っておくよ、マルフ殿」

L・O・Nは振り向きざまに目の中に入っただずんぐりとした人影に
言った。ドワーフと呼ばれる種族の男である。名はマルフ。L・O・
Nとは同じ釜の飯を食った仲と言う関係だ。仲間の中では一番付き
合いが長い。至高神「ファリス」の神官であり、スカウトでもある。
一風変わったドワーフだ。

「その娘はどうしたんだ？」

マルフはL・O・Nの後ろに隠れた少女を指差して言う。

「さっき拾った」

「……」

「いかがですハーブティー？」

アスティのほんわかした声が冒険者の店の食堂に響く。エルフ族の
中でも屈指の美貌を持つ彼の声はシレンの歌声のように聞くものの
心も和ませる。

「あ、欲しい欲しい」

ミアがカップを出す。

「あ、ボクも欲しいな」

と、横から声を出したのは十歳くらいの少女である。

「じゃあ、ライトのもの」

ミアはそう言う彼女のカップもアスティの方に渡す。

この少女もまた彼らと一緒に旅をする仲間の一人である。さっきは
とっさに少女と形容したが実は彼女はグラスランナーと呼ばれる種

族であり、人間族ではない事を付け加えておこう。彼らの仲間で一番年齢と外見のギャップが大きいだろうが、彼女にも歳を聞くという行為もためらうものがある。性格は……自分が退屈する事が大嫌いで常に何か面白い事を求めているというグラスランナーらしい性格をしている。

珍しい事に、このパーティーは全員が異種族のパーティーである。まともな人間は誰もいない。

「あれ？もうご飯は終わったの」

と、あらかた食事が終わった所にL・O・Nの声が冒険者の店の入り口から聞えた。その横にはマルフを居る。

「マルフも一緒だったの？あれ？その子は」

ミアが尋ねる。L・O・Nは「ああ、そう言えば」と拍手を打ち、少女の方を向くと、少女は目を丸くして、一点を見詰めている。

「？」

L・O・N達が彼女の視線を追うとそこにはお茶を入れるアステイの姿が見えた。少女の目からはうっすらと涙目になっているのにその場にいた全員が気付いた。

「パパ！」

少女は関を切ったかのように感情丸出しの声をアステイに向けた。

「え？」

アステイはティーポットを落とす。

「「「パパ？」「」「」」

そこにいた一同が声を合わせて合唱した。

2

少女の名はアリスと言った。

雨上がりの森は空気が湿気を含んで重く身体に纏わり付く。村の薬草師としての修行中のアステイは日課となった薬草取りに森を徘徊

していた。朝霧晴れぬ森は「迷いの森」の様相を呈してはいたが、森の民である彼にとってはこの霧はさして問題はなかった。しかし、もし人間が迷い込んだら森は問答無用で牙を剥くであろう。

その日アステイは森の牙を初めて目の当たりにした。

一人の少女がうずくまっている。脚を赤く染めているのにも遠目から判断できた。どうやらこの霧のために足元の障害物を避けそこなったようだ。

「大丈夫ですか？」

彼はそう言って彼女の上体を起こす。と、彼女の胸には幼児が抱かれている。そして、その子は信じたくはなかったがハーフエルフである事は確かだった。

「彼女の子供だろうか？」アステイはそう思ったが、それにしては少女はまだ幼すぎるような気がする。少女はアステイの顔を見た。その顔は青白く表情も辛そうに歯を噛み締めている。

「この先のエルフの集落の方ですか？」

少女の声はか細いながらも何とかアステイの耳にも届いた。アステイは無言で頷くと、彼女の足の怪我を診た。出血の割に衰弱が早い、何らかの毒だろうか？早く手当てをしないと危ない。アステイの表情を読取ったのか少女はアステイに胸に抱く子供をアステイに託そうとする。

「この娘だけは、どうかこの娘だけは……」

少女は気絶してからもそのことだけを何遍も繰り返していた。

「と言う事があったんですよ」

間延びした声が聞き手の耳に届く。

「その少女はどうなったんだ」

L・O・Nが尋ねる。アステイの周りにはL・O・N、マルフの二人だけがいる。

ミアとライトは「私達子供だから」と言ってL・O・Nの助けた少女を連れて二階に行っている。ま、一理あるのでL・O・Nとマ

ルフはそれを止めようとしなかった。

「一命は取り留めました」

そして、L・O・Nとマルフはアステイから彼女との詳しい経緯を聞いているのだ。話の内容は聞いた通りだ。怪しいところは今の所見られない。

「看病をしたのか？」

アステイが嘘を吐いていれば話は変わってくるが、この青年についてはその可能性はまずない。なんせ正直が服着て歩いていると形容しても誰も笑うものはいないくらいのお人よしであるからだ。

「ええ、半年ほど一緒に暮らしていました」

「その時に、君をパパと呼んでいたわけか三つ子の魂と言うやつじやな」

マルフがしみじみと言った。

「と言う事でわかっていただけましたか？」

「だいたいな」

L・O・Nが言った。

「母親が居ないのが気になるところだな」

「ええ、それに関しては僕に飛びついてきたときに『ママがママが』と言っていましたけど」

アステイが呑気に言った。

「どういう事だろうな」

内心その理由を想像する事はたやすかったが、取り合えずL・O・Nはそう言ってみる事にした。

さて、大人の話すると聞いて追い出してきた（追い出されたわけではない）ミアとライトと少女は、二階にある彼女達二人の部屋にやって来ている。三人部屋の所を二人だけでしか使っていないのでかなり広く感じる。そんな中で三人は大人しく待っていた。とりあえずは……

「外に変なのがいるね……」

と、窓から目を離してミアが声を出した。

「きつとママのパパの雇った人だよ。ママが言ってたもん」

アリスがそう言った。「聡い娘だ」とミアは思った。言動などから十年は生きていないのに意外としっかりした一面を持っている。自分と彼女を重ね合わせながらミアは再び窓に目を戻した。こない娘をどうして狙うのだろうか？ミアは彼女の祖父の頭の中身をいぶかしんだ。

「アリスはお母さんから自分のお祖父さんの事を尋かなかったの？」切り出したのはライトだった。彼女の事だろうから深い意味はない。ただ興味を持っただけであろう。

「ううん。ママのパパのことは尋かなかったけど、ホントのパパの話はよくしてくれたよ」

「アステイじゃないの？」

「あの人もパパだよ」

子どもらしい理論である。その辺がまだ子どもだなと思う。

「で、パパはどんな人なの？」

ミアが窓から再び目を離し尋いた。

「パパと同じシュゾクなんだって」

このパパはアステイの事を指すのだろう。まだ、エルフやドワーフのような区別がついていないのだろうか？

「彼女の父親はイルクの森と呼ばれるこのエストーン山脈とカーン砂漠の中間に位置する森に住む、風守りの部族の族長の息子だそうです。この部族は代々風の王ジンと盟約を結ぶのです」

アステイが静かに言った。

「何のために？」

「意味はありません。といったら語弊があるかもしれませんが、もう失伝してしまっただけです」

「エルフほどの長寿の一族が忘れるなどと言う事があったのだな」マルフが物珍しそうにアステイを見る。

「そうですね」

寂しそうにアステイが言う。本当は儀式の意味を知っているんじゃないだろうか？しかし、L・O・N達はそのことには触れず話の続きをするようにうながした。

「彼女……名はアリエスと言うんですが……はクライン家の一人娘として生を受けました。なに不自由な生活でしたが、一つだけまなならないことがあるとすれば彼女自身が病弱だったと言う事でした。そのために彼女はオランにある屋敷を離れてクライン家の別荘で療養生活を余儀なくされていました。」

その時、アリスの父親のミューレに出会ったそうです。彼は僕によく似ていたと言っていました」

「……お前じゃないのか？」

「いいえ、私はその時、薬師として修業中の身でしたから、とんでもない」

冷やかな目で見られながらも、アステイは話を続けた。

「ミューレは彼女の事を不憫に思ったのか、自ら村を出て生命薬を探し出して彼女に与えました。それから、彼女との交際が始まりました。しかし、別れのときが訪れたのです」

アステイは息を切り、「ハーブティーでも入れましょう」と言った。

「なんか、妙なラブロマンス聞いているみたいだな」

L・O・Nが言った。

「しかし、だんだんと話が見えて来たな」

と、マルフ。

「そうだな……」

腕組みを組みなおして、L・O・Nが言う。

「おそらく、さっきの冒険者を雇ったのはあのお嬢ちゃんの祖父君じゃろう」

「クライン家か」

マルフの言葉を聞いてL・O・Nが思い出したかのように言った。

クライン家の当主。ガラフ・クラインの話を思い出した。五十を数年前に越えたくらいと言う老年でありながらオラン王国の社交界で絶大な発言権を持つ。その為、暗い噂をよく耳にする。正室との間に生まれた三人の子供は、そのどれもが上貴族（諸侯）に嫁ぐなり入り婿にいつている。その昔、自分の娘を王太子ランデーヌの正室にしようとは画策した事もあるらしい。彼女は末娘と言う所だろう。「何かと目敏いランデーヌ王子を牽制するために包囲網を敷こうとしているらしいが、そのための道具として彼女を使うつもりもいない」

「どっちの彼女だ？」

マルフはL・O・Nに向かって言った。

「ママがね、『お父さんは私を道具としてしか見てくれなかった。自分の出世のためのね、だから私は彼の児を産もうと思った。でもね、私達はしっかり愛し合っていた。歳も、種族も離れていても私と彼は魂でつながっているのよ』って」

さっきから、少女は休まず喋り続けている。おしゃべり好きのミアやライトでさえ、こんなに饒舌ではない。しかもその内容は母親が話してくれたと言う父親の昔話である。かなり美化された話であるだろうが、母親の受け売りの丸覚え……その割には、アクセントの付け方から感情までしっかり表現されている。彼女には詩人の才能があるようだ。しかし、さすがのミア達にも疲れが見える。

「でね、つい最近ママのパパがママを連れ戻しに来たの」

「!どうして」

さっきまでだれていたライトが跳ね起きて聞いた。

「わかんない」

そのまま床に突っ伏す。

「しょうがないよライト」

突っ伏したまま動かなくなったライトにミアはそう言って慰めた。

「私も連れて行かれそうになったんだけど、この街に入ったときに

ママが逃がしてくれたの」

「そう」

そして、冒険者に追い駆けられる羽目になり、今に至るわけか。納得がいったミアはそのことを下にいるL・O・N達に伝えようと部屋を出ようとした。

扉に手を掛けて開けようとすると、手応えなくその扉が開けられる。目の前には黒一色の装束に身を包んだ人間だった。

「眠れ……」

彼は一言そう言った。

やがて別れのときが訪れた。

彼は族長の息子として風の王との盟約を交わしに行く事になったのだ。この儀式に成功して帰ったものが少ない、彼は覚悟を決めねばならなかった。

「行ってしまうのですか？」

彼女はそう言った。

「ああ、アリエス。行かなくてはならない。これは部族の掟なのだ。しかし、この夜を最期にしない。きっと戻ってくる。約束しよう」

「お待ちくださいっ！どうか行かないでください」

少女は必死にエルフの青年を引きとめた。

その鬼気迫る表情に青年も神妙になる。病弱で気の弱い少女である。ここまで積極的になるのにはわけがあるに違いない。

「君らしくないな……」

細く白い指がゆっくりと少女の頬を撫でた。

「私には、私のお腹の中には――」

その後の言葉は、青年にしか聞こえなかった。

「なんだって！」

その言葉の意味することを青年は判っていたし、心当たりもある。愛していたから。

ただ、それだけが情愛ではないということだ。

「お願いします。私は貴方の子供を産みたいと思います」

アリエスはミューレの目を見て言った。

「馬鹿な！」

ミューレの雅な口から、信じられないくらい大きな声が出た。

「貴方はきつと後悔します。お辞めなさい。もし、生まれてきても誰にも祝福されない。

そう、つなげようとして口を開きかけるが、少女の目は覚悟を決めていた。

「お願いします。行かないでください。私と生まれてくる子供のために……」

決して祝福されない子供であっても、両親さえいれば生きていける。父親に見捨てられるように、この別荘に入れられた少女は、切望した家族を自分自身で作ろうとしていたのだろうか？

しかし、それは――

「叶うことは無かったわけです。そのときの子供がアリスなんだそうです。結局、彼は儀式に行き、そして、戻りませんでした。風の噂では、儀式中に何か心配事があったそうで、そのためにジンの息に飲まれたのです」

アステイはそう言うとかップに残った残りのハーブティーを喉に流し込む。

「なるほど、アリスって娘の身の上と、お前の子供でも無いということのはわかった」

「あのですねえ……」

L・O・Nの言葉に否定の声を叩こうと思った時にマルフが、その声を遮った。

「上から変な物音がしたぞ」

「なに！」

「ミア！ ライト」

アステイが半開きになっていた扉を全開にする。そこには倒れた少女たちがいた。アステイは、彼女たちの上体を起こして息を確かめる。までもなく。

「もう食べられない」

ライトの無責任な寝言に一瞥くれると、そのまま床に落とす。

「痛いなあ、もう」

痛いのはこっちの頭である。

「アリスはどうしたんです？」

珍しくアステイが明朗快活の活躍を見せている。

「え？ ええっとミアちゃんに尋いてよ、ボクは床に倒れていたからわかんない」

「……何も言うまい、この娘に関しては」と、アステイは思ったに違いない。取り合えずライトに言われた通り、ミアに気付をする。

「あ、アステイ……ごめん……私がついていながら」

「気にしないで下さい。ライトさんでも気付かなかった事です。貴方に気がつけという方が無理というものです」

アステイは優しく言う。

「もう大丈夫だよ」

ミアはそう言うのアステイに肩を借りながら起き上がる。手足がふらついているように見える。一体どんなことをやられたのだろうか？

「恐ろしい奴等だな」

「一人だ」

「？」

L・O・Nは窓の外を見ながら言う。なにを見ているのだろうか？

「彼女をさらった奴はわかってる。アステイ、君が決める」

L・O・Nがいつものようなヌーボーとした表情から死神のそれになっっていた。

「……私は、彼女を助けに行きます。手伝ってくれますか？」

「どっちを」

「わかりません。けど助けに行かなければいけない。そうしないと

私は彼を悲しませる事になる」

アステイの表情も、いつものような茫洋な美貌にはっきりとした決意が一点光っている。

「わしにも気が付かなかったという咎がある。手伝わせてもらうぞい」

「私も行くわ、このままじゃ悔しいもん」

「面白そー」

「決まったな」

L・O・Nはそう言った。一同は支度を整えに部屋を出て行ったが、L・O・Nだけはその場にしばらく残っていた。

彼の見ていた窓のさんには、奇妙な文字が書かれていた。その文字はL・O・Nにしか読む事の出来ない蛮族の文字で――レイトグリフ・オブ・ノーマッド――と書かれていた。

3

クライン家の屋敷。オランの貴族にしては珍しくその屋敷は城壁外の森の中にあった。屋敷と言うよりは小型の城と言った方が想像し易かろう。周りを森に囲まれ、更にその周りは見渡しの良い平原広がっている。すでに時刻も宵の口と言う所だろうか？

その屋敷を丘陵から遠目に見やる五人の若者たち。

L・O・N、アステイ、マルフ、ミア、そしてライトの五人である。

「かなり用心深い奴のようじゃな」

「臆病でなければ生きてはいけないのだろう。戦場も政治というものも」

L・O・Nとマルフが呑気に話している。

「どうやって中に入るの？」

「入口から入って出口から出る」

ミアの言葉にL・O・Nは答える。こんなものは作戦とは言わない。

「……まじめに聞いているんだけど」

「僕もまじめだ」

L・O・Nが言う。表情には出てはいないがかなり頭にきているようだ。

「さっきライトに調べて来てもらって、彼の屋敷……と言うよりちよつとした城だなこれは……には、私兵が三百人もいる」

「一介の貴族にしては、ちよつと多くはないか？」

マルフは、ライトの書いた屋敷の見取り図を覗き込んで言う。

「夜だけのボディガードというところだろう。暗殺なんて夜陰にまぎれるっていうのは定石だからな」

L・O・Nがのんびりと言う。

「では、昼間に来れば良いんじゃないんでしょうか？」

アステイが言う。

「それもそうなんだけどな、この三百人と言う私兵を使わないのは勿体無いかかって思ってたさ」

L・O・Nが悪戯小僧のような笑みを見せる。洞窟に隠れた盗賊団に煙による燻りだし作戦を発案したときもこんな顔をしていた。

「ま、黙って今回は僕に任せなさい」

L・O・Nはそう言うのと、彼らに作戦を打ち明けた。

「異常なし」

金属鎧を鳴らし、敬礼をした。

「ご苦労」

専用のデスクに腰を下ろし、報告者に劳いの声を掛ける。彼はこのクライン家の武官エドガーと言う男である。元々日雇いの冒険者としてこのクライン家に雇われた男だが剣の腕を買われこの家に住み込みのボディガードになった。つい最近になり、夜中に三百人という途方もない護衛増加を主であるグラフが言い出したときに彼は真っ先に反対の意思を示したが却下された。

「なにがそんなに不安だと言うのだ？」

エドガーはそう思いざるを得なかった。人数が増えれば、統率は乱

れ、対立が起こる。これは、進入者の付け入る隙を与える事になる事をエドガーはよく知っていた。人は道具ではないのだ。

——ドン

そして、今夜はその予感が的中した。

倉庫の方から爆発音がした。外がにわかに騒ぎ出す。

「賊か？」

誰かがそう言った。

「何でもいい、出来高報酬だからな、何か起きてもらわなくては困る」

「それもそうだ」

そんな会話が外でなされる。エドガーはそれを聞いて頭を抱える。これは策だ。しかも一番単純な！用兵の基本である「相手を自分の有利な場所に移動させる」と言う初歩の手である。エドガーは手元に愛剣を手にして、彼の部下達とともに正門の方に向かった。

「ホントーに殺しちゃっていいの？」

何故か嬉しそうにライトはL・O・Nに尋いた。

「殺っちゃって殺っちゃって。保険は懸けといたからさ」

L・O・Nは無責任にそう言った。ライトは、そんな事露にも思わず門に立つ二人の男の方に向かって行った。

「そこで何している！」

「ここ通して」

ライトは、男達に向かってぶりっ子ポーズを取りながら言う。

「馬鹿にしてるのか！」

と、男の一人が、腰の剣の留め金を外した。その刹那、一本ダーツが彼の喉笛を食い破った。そのまま男は絶命する。そんな仲間を横目で見てから、再び視線をライトに戻す。手には一本の短剣が握られている。

「こ、こいつっ！」

相手の持っている武器が貧弱なナイフで余裕が出たのか、それとも

恐怖からかは判断しにくいが、男の顔には笑みが見えた。相手との間合いを計り、男は手に持つ槍で突き掛かった。が、その槍はライトを捕える事はなかった。そして、その失敗を悔やむ事もなかった。ライトはとんぼ返りで彼の背面を取るとその首に短剣を差し込んだ。短剣は元もとそこにあつたかのように吸い込まれ、守衛は声も出せずに絶命。

「終ったよ」

ライトは、明るくそう言った。

「いつもながら鮮やかじゃな」

マルフは苦虫を潰したような顔をした。いくら正義のためと言って、こういう殺し方は好かないのだ。暗殺者のそれは……

「さて、マルフ。用意してくれ」

L・O・Nが皆を促し、準備を始めた。

しばらくすると、門の前に人影が三つほど現れた。エドガーと彼の部下である。

門は少し開けられてその前にはL・O・Nがいる。

「稚拙な策だな」

エドガーは言った。

「守衛を殺した手腕には感服しよう、だがこの屋敷に入れるわけにはいかん。抵抗しなければ楽に死ねる」

と、言うときエドガーは剣を引き抜いた。その言動に隙が無く、L・O・Nは斬り込む機会を逸してしまった。

「けっこうできるな」とL・O・Nは本気で思った。

「退屈凌ぎにはなるかな」

L・O・Nはそう言うとき、肩から、三メートルはあろうかと言う大鎌を下ろした。

「さあ、始めようか？」

「外が騒がしい」

美女と形容しても誰からも怒られる事はないであろう女性が、月光に照らし出される窓の外を見ようとする。

「お辞め下さい、危険でございます」

肉付きの良い中年女性——おそらく彼女の侍女だろう——が、彼女を止める。

「何をするのです、放しなさい」

彼女はそう言うと、侍女の手を振りほどき、窓際へと移動した。と、そこに一人の男が現れる。

「！」

女性が身を固める。容貌そのものは美しいが、その目にぞっとする冷たさを感じる。

「いけません、物語の姫君は大人しく王子様を待つものですよ」
男はそう言うと、彼女の手を強引に掴み、引き寄せた。彼の目と、自分の目の間が握り拳二つ分くらいまで近づく。

「何を」

「娘は無事だ」

彼はそれだけを言うと、「瞬間転移」で消え去る。

「え？」

彼女は疑問符を浮かべた。それだけを言うために彼はここに来たのだろうか？それは彼にしか判らなかった。

侵入はかなりあっさりとできた。うまく行き過ぎて少し怖いくらいだ。

騒ぎに乗じて中に入る。実行組の二人アステイとミアは魔法の光によって照らし出された廊下をすたすたと歩いている。L・O・Nの言った通り、屋敷の護衛はほとんど外に出ているらしく今のところ作戦の危険因子となるものはなかった。

L・O・Nの作戦は個々の能力を信賴しての作戦だった。まず侵入組と、囃組とに別れる。侵入組は屋敷の倉庫に火の手を上げて騒ぎを起こし、三百人を一つの場所に呼び出し、混乱状態の中でそのま

ま屋敷の中に潜り込む。囃組は正面から堂々と侵入し、わざと見つきり屋敷の外に曲者がいると思ひ込ませる。その間にアリエスとアリスを侵入組が助け出す。と言う寸法だった。

そして、侵入組にはアステイとミアが、囃組は残りの三人がやっている。

予定通り、L・O・N達はエドガーに発見してもらい。連中の注意は外を向いていた。

さすが傭兵をやっていた事はあるとミアは思った。

「確か、ここですね」

アステイがミアに話しかける。

「そうよ、ここに多分アリエスさんが居るんだと思う」

記憶した見取り図を思い出しながらミアは言う。間違いはないだろう。

「鍵はかかっていますね」

アステイはそう言うと言扉を開ける。部屋の中は暗いが、「暗視能力」のある精霊使いのアステイには関係無かった。

「何か見える？」

ミアが言う。

「いいえ、何にも」

——ここにはもう居ない。

と、いきなり頭の中に声が響いた。二人ははっとなり辺りを見回すが、誰も居ない。

「誰です？」

——貴様たちの捜し求める女性はここには居ない。ガラの部屋にいる。彼女の娘も一緒に……

と、声は一方的な会話を切り上げた。

「どういう事でしょう」

「とにかく言ってみましょう。今の所、情報はそれしかないから」

「くっ強い」

エドガーは剣を向けている男の感想を心の中で述べた。エドガーは剣士として今まで遅れをとる事はなかった。現にこの屋敷に無断侵入した深夜の来訪者のこと如くを屠ってきたのだ。これからもうであつただろう。彼に会う前までは……

エドガーの前に立つ男は大鎌を持ちながら、その斬撃、反応速度、技のさえ。どれ一つ取つてもエドガーよりも巧みであつた。かろうじて鎧の厚さで持ち堪えてはいたが、次の一撃を受けきる自信はなかった。

彼は構えらしい構えを取らず、自然体をこちらに向けている。長大な鎌は肩に担がれている。一件無防備に見えるが、大鎌の戦術としては「後の先」が基本である。大鎌の刃は内側に付いている。そのため武器の巨大さの割りに間合いは狭いのだ。さらに、向かつてくる相手には「刈り取る」という攻撃は効果は薄くなる。鎌は引かなければ切れないからである。なので、相手の攻撃を誘い、攻撃を避けてその背面を取る。そして、必殺の斬撃で相手を倒す。それが基本である。

「くそ」

とんでもなく技量のいる武器であるが、彼は完璧に使いこなし、エドガーを翻弄していた。後背を突こうとした部下は門の外から放たれた「気弾」であっさりとのされてしまった。目の前のこの男に運良く勝つても外の人間を相手にしなければならぬ。不利である。不利を悟って部下の一人に警笛を鳴らさせたが、あの騒ぎの中で幾人気がついただろうか？

「くっ」

負けは初めてではなかったが、こんな圧倒的な負けを喫したのはいつ以来だろうか？エドガーは負けを認めざるを得なかった。

「しかし、お前たちは屋敷の中に入る事はない。警笛を鳴らしたんだ、もう十分もすれば三百人の私兵が来る事になるぞ」

エドガーは負け惜しみを言った。が、その場に残った全員がそれに耳を傾ける事はなかった。目の前のL・O・Nもマルフも珍しくラ

イトすらも屋敷の一室に目を向けていた。

「？」

疑問に思ったのかエドガーも彼らの見ているものを見上げた。すると……

「やめるんだ！アリエス」

髪を整髪料でオールバックに固めた男が、窓の傘に素足で上がった女性――アリエスだろう――に言った。

「やはり、私の事を道具としか、見ていらっしやらないようですね」
二十代も半ば過ぎと言う美しい女性は冷ややかに目の前の男――ガライである――を見つめた。その目には明らかに死を覚悟した目をしていた。その母を呆然と見上げる少女。

「アリス……こちらにいらしゃい。一緒にお父さんの所へ行きますよう」

その微笑みは大地母神マーフアもかくやと思わせるほどの優しい笑みだった。少女は、迷いもせずと母親に近付いた。

「やめろ！そこから降りるんだ。貴様もボーっと見とらんで奴等を助ける呪文の一つくらい唱えんか！」

と、隣にたたずむ黒衣の青年に声を掛ける。青年はこう言った。

「大丈夫です。もうすぐそれはここに来るでしょう」

何が来るのか、ガラフには判断つきかねた。

しかしその数瞬後、彼の言った意味が理解できた。

アステイ達が到着したのだ。

「アリエスさん！」

アステイが叫ぶ。

「貴方がそんな事をしても彼が悲しむだけです！やめて下さい！無意味です」

いつものアステイの見せる表情とはまったく違う。それがミアには少しうらやましく思えた。

「貴方は……」

彼女はいきなり再会に驚いている。それもそうだろう。この偶然は神が彼らに与えたもうた奇跡かもしれない。

「アスティさん」

名を呼ばれてアスティの気配から緊張が消える。

「私のいう事をよく聞いて下さい」

アスティはそう言うのと穏やかに話し始める。

「貴方はまだ死ぬべきではありません。それは彼の望む事ではないから……彼は貴方をいつでも見守っていました。貴方が、私の所から立ち去るまで……そして、貴方が全快したとき彼は私の盟友としての契約をしました。貴方を助けるために精霊使いとしての禁忌を犯してしまった私の手助けをするために……」

アスティはそう言うのと横笛を一本取り出した。

「開封」

アスティのシレンの響きが、その部屋に響いた。

一陣の風が部屋を流れる。それは、精霊使いでなくとも容易に判断がついた。

「ミューレ？」

アリエスがまさかと呟いて窓の傘から降りてくる。アリスを抱えて……

「彼の肉体は滅びましたが、精神は常に貴方とともにありました。貴方が、森の毒に侵されているのを私に教えてくれたのも彼でした。貴方は一人ではなかったんです」

アスティは穏やかな調子で彼女に告げた。ジンの息にかかり、死してなおも愛する少女を見守り続けたエルフの青年。ミアは涙ぐみそうになった。

「さて、その辺でいいだろう。ドレットこいつらを殺してしまえ」
ガラフが冷酷な命令を黒衣の青年に告げる。

「……下衆が」

黒衣の青年は吐き捨てるように言った。

「欲に目が眩み、自分の娘すら道具に見えるか」

「何をごちゃごちゃ言っておる。早くしろ」

ガラフはそう言うのと、くの字型のワンドを取り出す。

「殺らぬのなら、貴様も片付けてやる」

目にはありありと狂気の色が見えている。

「ライトニング・ブラスター」

ミアの口から恐怖に震える声が聞える。

「とんでもない武器よ。あれは……」

「名前を聞いただけでわかりますよ」

アステイが言った。彼の背後には鎧を着た女性が浮かび上がる。

「アリエスさん達は下がって下さい」

アステイがそういう前にアリエスがガライに向かって走り出した。

「止めてお父さん！」

その声はガラフの動きを止めた。その表情には驚きと怒りと後ろめたさと……さまざまな感情が入り乱れていた。

おそらく、初めて娘から父と呼ばれたのだろう。その響きがこの権力欲に駆られた俗物の心に楔を打ったのだろう。

その一瞬、彼に隙ができた。アリエスは父と呼んだ老人と一緒に書斎の窓から飛び降りた。

「「！」「」」

その場にいた、四人は虚を突かれ何も出来なかった。

――ビュン

突風が部屋に巻き起こる。突風の作った旋風の中でアステイは誰かがアリエスを呼ぶ声がしたような気がした。突風が止み一同は窓の下を見下ろした。二人の人間が倒れている。アリエスとガライだろう。二人は抱き合って墜落したらしくその手は相手の肩を抱いていた。

「！落ちたぞ」

人影が消えてほっとした所にフェイントをかけたかのように二人の人間が落ちてきた。

「ガライ様！」

ガライの方は頭が完全に潰れていた。即死だろう。マルフにも、死者を生き返らせる事は出来なかった。

しかし、女性の方はまだ望みがあった。重傷のためか「治癒」の魔法が効きにくい。危険な状態には代わりなかった。

「自分の未熟さを思い知らされる」

マルフが悔しそうに言った。その時、上空から四人の人影が……

「ミア、アスティ、アリスー！」

ライトが嬉しそうに言う。

「……」

L・O・Nが何かを言う。が、その声を聞き取った者はいない。しかし、L・O・Nの気配に微かな殺気を帯びた。

「今はそれどころではなからう」

彼はそう言うのと、アリエスを見た。

助かるのは絶望的だった。

が、アスティは意を決したかのように彼女に手を翳した。

「なにを……」

ミアが叫ぶ。

「汝の乗り手たる者が、今死なんとしています。どうか、その気高き汝を我が使う事を許し給え」

アスティの「精霊語」による呼びかけが行われる。その願い通じたのか、

「汝のその想いに答えよう」

と言って現れたのは何と「一角獣」だった。生命の精霊の伝い手。

その無駄にまで高い自尊心はその背に処女しか乗せないと言う。神聖な動物。

そして、女性の精霊使いにしか召喚できないと言われている。

一角獣はその角をアリエスに近づける。すると、アリエスの身体から肉眼でも確認できるくらいのおーラが迸る。

アリエスの顔色に赤みが指す。唇がゆっくりと動き出し、目がうつ

すらと開きだす。

「う……」

「気が付きましたか？」

目覚めようと言う彼女にアステイは優しく声を掛けた。

「私は、彼女を助けるために一角獣を呼び出さなければなら
ないと思っただけです」

アステイが言う。

「でも、一角獣は女性にしか呼び出せないじゃない。え？ 女の人
だっただけ？」

ミヤが言う。確かに男性の精霊使いは一角獣を呼び出すことは
できない。

が、アステイははにかんだ。

「僕は男性ですよ。それにあの時も今日も彼を呼び出すにふさわ
しい人がいたじゃないですか？」

アステイはにこやかに微笑み返した。

「まあ、そのために私は森を追われることになったんですがね」

「そうだったんですか」

アリエスはそう言うと言を垂れる。

「私のせいで貴方が故郷を追われていたなんて」

「気にしないで下さい。私はこれでも嬉しいんですよ。世界をめぐ
り、仲間に出会い、見聞を広めることができました。それにあなた
も救うことができました」

アステイは満足そうに言う。その顔はいつもの茫洋とした彼の顔だ
った。

「そう言えば何かを忘れていたような気がするよ？」

ミヤはアステイの話が終わると同時に、ふと、頭の片隅に引つかか
っていたことを口に出した。

「そう言えばそうですね」

「麗しの我が家」亭には、大勢の冒険者とアリエス、アリス親子と

アステイの仲間である、マルフ、ミア、ライト……

「「L・O・Nがない!」」

一同は一斉に声を出した。

ばちばちと、暖炉の火が静かに燃えている。その前に立つ二人の青年。

L・O・Nと、黒衣の魔術師。

「久しぶりだな、レイトグリフ」

「どういうつもりだ? 僕を殺しに来たなら、なんでこんな手の込んだ事をする」

鋭い眼光を黒衣の魔術師に向けてL・O・Nはそう言った。その手には大鎌ではなく、淡く光る長剣が握られている。

「そうだな、お前を殺すのは簡単だ。しかし、それだけではつまらないだろう?」

黒衣の魔術師はそう言う杖の先をL・O・Nに向ける。

「ふざけるな、お前のせいで人が死んだんだぞ!」

「関係無い、人はやがては死ぬ運命なのだ、それを逆らって生きようとした愚か者だ。死んで当然だな」

魔術師は手に持つ本を思い出したかのように暖炉にくべる。パチパチと音を発てながら燃えていく本を見ながら恍惚とした表情を見せた。

「!」

「炎よ!」

魔術師はそう言う暖炉に向けて「火炎球」の魔法を放り込んだ、景気のいい爆発音が、広い部屋に木霊する。

「何をする」

L・O・Nが叫ぶと同時に、魔術師は杖から鋭い刃物が突出させて、L・O・Nに躍り掛かった。「早い!」L・O・Nが心の中で叫びながら、何とかその一撃を剣で弾く。と同時に剣の柄で顔面を殴りつけ、魔術師を吹き飛ばす。しかし、魔術師側も負けてはいない、

置き土産よろしくの「火炎球」を当て込んだ。

爆煙は晴れ、所々に火傷を作り、頭を垂れたL・O・Nが立っていた。

「無事だったか？ま、牙の部族の戦士であるならば当然か……」

魔術師は余裕の表情を見せ、杖を構え複雑な身振りを始める。が、その行為は途中で中断を余儀なくされた。

ゆっくりとL・O・Nの顔が上がる、その顔を見て、魔術師の余裕が無くなった。

「そ、そんな馬鹿な！どうしてその能力がっ！貴様などに――」

原因不明の爆発によって半壊した城を丘の上から眺める人影。

「もう使う事はないと思っていたのに……」

まだ淡く光る目から一条の涙を流し、L・O・Nはそう言った。

クライン家の当主の死と屋敷の爆発事件はこの二週間ばかり街の持ち切りの話題となった。が、その真相は未だ解らずじまいだ。賢者の国の賢者の学院が解らなかったと言う事件としてもこの事件は歴史に残る大事件であろう。

そして、そんなある日「麗しの我が家」亭の前にはL・O・N達がアリエス母娘を見送りに外に出ていた。

「もう行かれるんですね」

アステイは言った。なかなかうまいはなむけの言葉が浮かばない。

「ええ、この街にも長く居過ぎました」

正確に言うのアステイの側に、だろう。彼女たちにはアステイのような冒険者を生業にすることは出来ない。それに、一緒にいると頼ってしまう。

「あなたを……」

「はい？」

「いえ、では皆さんにリュテイクのご加護があらん事を……」

彼女はそう言うのと彼らに背を向けた。

「リュティークって何？」

ミアはちようと隣にいたL・O・Nに聞いた。

「旅を守護する者と言われる神のことだ」

L・O・Nはそう言う。

「へえ、そんな神様がいるのかー」

ミアはアスティの首に首輪をつけながら言う。

そう、そう言えばそんな神様がいたな。

L・O・Nは空を仰いだ。晴天の空に、つばめが舞っている。

「春だな」

L・O・Nがしみじみとそう言った。

（後書き）

リユテイクというのは、クリスタニアRPGに付属するキャンペーンシナリオのキーとなる古代神で、キャンペーン後、ツバメの体に宿り、神獣という存在となります。

かれこれ、10念以上前に書いた小説で、見るたびにちょこちょこ推敲していましたが、果たして皆様の目に晒せるものになっているでしょうか？

ところどころ、無理のある設定、訳のわからない言動があったりしますが、実際連作のつもりで書いたものだったので、それが明らかになることはありません。

友人によく言うのですが「僕の中では完結している」作品の一つなので、すっかり、忘れてしまいました。

ふとしたことで、思い出すかもしれませんので、その時にまた投稿したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0595ba/>

ソードワールド短編 「風の舞う日」

2012年1月1日09時48分発行